アフリカ子どもの本プロジェクト(JACBOP)
2016 年度活動報告

１、概況

アフリカ子どもの本プロジェクトも結成 13 年目を迎えました。毎月定例の運営会では、ドリームライブラリーのことや、お薦め本の選定など、さまざまなことについて話し合っています。ブログやフェイスブックでの発信も続けています。また、ウェブサイトを刷新したことで、興味をもって見てくださる方も増えたのではないかと思っています。日本の子どもたちにアフリカの文化や子どもたちのことを伝えるための「アフリカを読む、知る、楽しむ子どもの本展」は、公共図書館の運営が外部委託になったり、予算が削減されたりしたこともあり、開催希望団体がなかなか増えない現状があります。それでも４箇所で開催することができ、好評だったという声をいただいているので、さらに広報に努めて開催地を増やせるようにしたいと思っています。

ケニアのドリームライブラリーについては、支援した教科書が届いて子どもたちが喜んでいる写真などもブログに載せたので見てくださった方も多いと思います。細かい問題もいろいろと発生していますが、その都度話し合って解決を図っています。

支援グッズも、沢田としきさんの絵がついた布バッグとマスキングテープの 2 点を追加して販売中です。

事務局員のいない、ささやかなグループのゆっくりした歩みですが、今後ともどうぞ見守っていただければ幸いです。

２、会員数

2015 年度末の会員数は 111 名、2016 年度末は 109 名となりました。

３、2016 年度活動報告(2016.4－2017.3)

３－１　運営会の開催

毎月１回運営会を持ち、アフリカへの支援、選書や図書展、イベント等の打ち合わせを行いました。

３－２　ドリームライブラリー等の支援

３－２－１　ケニアのドリームライブラリーについて

エンザロとシャンダにある二つのドリームライブラリー（子ども図書館）は、2015 年度までは現地で活動する NPO「少年ケニヤの友」およびケニアの NGO であるドレスチコと共同で運営してきましたが、「少年ケニヤの友」の中心人物だった岸田袈裟さんの死去を受けてこの NPO が解散することになり、その支援で活動していたドレスチコも解散することになったため、二つのドリームライブラリーを「アフリカ子どもの本プロジェクト」が単独で支えなくてはならなくなりました。そこで 2015 年夏に 3 人のメンバー（佐藤、細江、さくま）が現地に出かけてドリームライブラリー関係者と協議を重ねました。その結果を受けて、研究フィールドが近い京都大学の松田素二先生の大変ありがたいご協力のもと、松田先生のお知り合いであるオディンガさんとモーニさんに、ライブラリアンの給料の送金や諸問題の連絡などを行ってもらうことになり、この二人がしっかりとその任務をこなしてくれています。

2004 年に設立したエンザロ･ドリームライブラリーは、週に６日（全日×５+半日×１）開館しており、年間利用者数はのべ 8,800 人になります。2008 年に設立したシャンダ･ドリームライブラリーは、週に４日（全日×３+半日×１）開館しており、交通も便利なところにあるので年間利用者数はのべ 3 万人近くにのぼります。

ドリームライブラリー側から要望のあった教科書も購入し（写真①）、新聞もライブラリーに届くようにしました。他にもさらに教科関係の本を入れてほしいとかコンピュータやカメラの支給してほしいなどの要望

が来ています。

ライブラリアンの毎月のお給料については、2016 年 4 月の段階で、エンザロのライブラリアンであるピーターさんには 9000 シル（それまでは 8000 シル）、開館日の少ないシャンダのライブラリアンであるアイリーンさんには 4500 シル（それまでは 4000 シル）に昇給して支払っていましたが、その後 10 月にもう一度昇給して、ピーターさんには 1 万シル、アイリーンさんには 5000 シルを支払うようになっています。これも、支えてくださるみなさんのおかげでできたことです。

運営に関しては、現地の図書館委員会がそれほど機能しているとは思えません。委員会を開いたら議事録をその都度送ってもらうようにお願いしていますが、まだ定期的には送られてきていません。エンザロでは、トイレと壁の補修に資金が必要だというので合計 2 万 3000 シルを送りましたが、何か月たっても着工していなかったという問題や、新聞がきちんと届いていないなどの問題が発生しました。しかし現在は解決に向かっています。
今後、ライブラリアンには年 1 度の蔵書点検をきちんとしてもらうこと、図書館委員会には委員会を開催しているなら議事録をきちんと送ることなどをお願いしていきたいと思います。

３－２－２　その他の支援
今年度はありませんでした。今後も会の活動として HP での活動報告を掲載し、それを見て、要請があった時に送本するという形で続けていければと思っています。

３－３　アフリカのことを知らせる活動
「アフリカを読む、知る、楽しむ、子どもの本展」（プロジェクトおすすめの本約 120 点とパネルなどのセットにした図書展。有償で貸し出し）は、次の 4 件の展覧会が開催されました。
・展示本は発送の際の条件、展示会場の広さなどを考慮し、新しい本を中心に 120 冊程度に調整しました。今回調整したのは、刊行年が古く情報が古くなっているもの、同じ作家で複数冊あるもの（残した本の書誌カードに、外した本の情報を加えました）、同じテーマで複数冊あるものです。

2016 年度は以下の 4 か所で開催されました。
①　藤の瀬会館（静岡県藤枝市）
7 月 17 日～18 日　主催：藤枝南ロータリークラブ
②　国立オリンピック記念青少年総合センター（東京）
8 月 19 日～20 日　主催：日本子どもの本研究会
③　世界の童話図書館（千葉県船橋市）
8 月 23 日～9 月 27 日　主催：世界の童話図書館
④　鹿児島県青年会館　ギャラリー艸舎（鹿児島県）
11 月 3 日～12 月 4 日　主催：鹿児島県青年会館

①藤の瀬会館（静岡県藤枝市）（写真②）
藤枝南ロータリークラブ主催、藤枝子どもと本をつなぐ会有志共催により、7 月 17 日～18 日藤枝市本郷の藤の瀬会館で開催されました。
ポリオ（小児まひ）撲滅に向けた募金活動にも取り組む同クラブが「絵本を通してアフリカを知ってほしい」と企画したもの。この展覧会は、実行委員の江崎直利さんが絵本専門士養成講座でさくま代表の講義を受けたことがきっかけで実現しました。会期中には、ひまわり畑内でのお話会も開かれ、絵本の読み聞かせのほか、手遊びや体操も行いました。

②国立オリンピック記念青少年総合センター（東京）（写真③）
日本子どもの本研究会主催。8 月 19 日（金）～20 日（土）、国立オリンピック記念青少年総合センターで

行われた第 48 回全国大会で、19 日記念講演「子どもの本を窓にして世界を知る」（さくまゆみこ代表の講演会場：カルチャ―棟・小ホール）とともに、センター棟・101 号室の広い会場で「アフリカを読む、知る、楽しむ子どもの本展」が開催されました。大会の参加者はのべ 750 名。

全国から参加したたくさんの人たちにプロジェクトが選んだおすすめの絵本、児童書を手に取って読んでいただけ、展示パネルなども見ていただけました。

・ 会場では、絵ハガキやＴシャツなどの支援グッズを販売しました。特に、今大会前に作成した沢田としきさんの絵がついたトートバッグとマスキングテープが好評でした。

・ この展示を見られた方からの依頼で「歴史地理教育」（歴史教育者協議会）の 2017 年４月号より１年間、「絵本で知ろう！　アフリカの国」という連載をすることになりました。

記念講演　「子どもの本を窓にして世界を知る」　さくまゆみこ代表　　（小ホール・定員 380 人）

さくま代表が翻訳した絵本や児童書などを中心にたくさんの本を紹介して、「『子どもの本を窓に』というのはどういうことか」、「今、世界を知っておくことの意味って何だろう」、「翻訳作品が果たす役割」について講演しました。参加者から、「本を手渡す意義を考えることができる機会となりました」という感想がたくさん寄せられました。（下記に記載）

※講演の報告…『子どもの本棚』（日本子どもの本研究会発行）2016 年 11 月号（№577）に掲載

《参加者からの感想》

・さくまゆみこさんのお話からアフリカのことが分かりました。
・さくまゆみこさんの講演は内容豊富であっという間の時間でした。具体的に本を紹介して頂いてメモを取る手が止まりませんでした。子どもたちに様々な世界を見て本の役割、可能性を再認識できました。
・ダブル（ハーフ）の文化を持つ生徒の公立中にいるので、多文化を知る私たちにとっての窓でもある本をたくさん紹介して頂き有り難いです。
・アフリカに限らず、多文化、多様性を知ることの大事さを今の日本では本当に求められていると感じた。
・子どもに「いろいろな窓を与える」ことの大切さを学びました。
・講演は考えさせられることが多くありました。子どもたちに紹介したい本、伝えたい事、新しい引き出しができました。
・本に対する情熱、本が広げる世界は限りないという話は、本を手渡そうとしている私に新たな思いを感じました。ますますお話や本の種をまこうと思いました。
・さくまさんの翻訳をしている本はたくさん読んで、特に絵本は高学年向けに読んでいます。高学年に向けては自分で考える絵本を作ってもらえる素材のような気がして、その翻訳家の方のお話がきけて、子どもにもう一度本を手渡すときの思いの伝え方が変わりました。
・講演を聴くことができて本当に良かったです。「今ここ」とは違う場所、違う時間が見える感が必要だというお話に非常に納得しました。心に残る言葉がたくさんあり、大変ためになりました。

③世界の童話図書館（千葉県船橋市）（写真④）

世界の童話図書館主催。８月 23 日～９月 27 日まで開催されました。延べ１５０人の方が来館。９月 24 日にはアフリカ音楽と絵本の読み聞かせ、お面作りワークショップも開催。プロジェクトからは紙皿を使ったお面作りのノウハウを提供しました。

④鹿児島県青年会館　ギャラリー艸舎（鹿児島県）（写真⑤）

鹿児島県青年会館主催。「アフリカを知ることは地球を知ること」をキャッチコピーに、11 月 3 日～12 月 4 日アフリカに関する児童書とアフリカの写真などをギャラリーに展示しました。参加者は、子ども 304 名、大人 379 名。

また、以下の関連イベントも開催されました。

・11 月 12 日：おはなし会その 1、アフリカのはなし/ブックトーク、ドラムワークショップ

参加者　子ども 69 名、大人 45 名。
・12 月 3 日：おはなし会その 2（今後共和国）/ブックトーク、アフリカ料理にチャレンジ
参加者　子ども 32 名、大人 28 名。

３－４　「アフリカに関する児童書　おすすめリスト」の選書

・ホームページの「おすすめの本」コーナー、「おすすめの本リスト PDF」には、2016 年 7 月までに選んだ本が入っています。
・今後はホームページの「おすすめの本」コーナーに、新しい推薦本の書誌を追加する作業をすすめます。
・「アフリカを読む、知る、楽しむ子どもの本展」の展示本は、新しい本を中心に１２０冊程度に調整していますが、ホームページにはこれまで選んだ推薦本全点を掲載しています。

〇2016 年度、選書会は５回開催。
15 冊を検討し、おすすめリストに入れることになったのは次の 5 冊です。

４月　　7 冊検討
『エジプト　アフマド～毎日がもりだくさん！』世界のともだち（常見藤代　写真・文　偕成社）
５月　　3 冊検討
『ゾウのこども』『ライオンのこども』サバンナを生きる
（ガブリエラ・シュテープラー　徳間書店）
→『ゾウのこども』をリストに入れ、『ライオンのこども』を解題にて書名を上げて紹介する。
６月　　2 冊検討
９月　　3 冊検討（２冊次回へもちこし）
11 月　　２冊検討（９月の持ち越し分）
『ボノボとともに　密林の闇をこえて』
エリオット・シュレーファー作　ふなとよし子訳　福音館書店
『君の話をきかせて　アーメル』ニキ・コーンウェル作　渋谷弘子訳　文研出版

〇2017 年度に向けて
・翻訳本の刊行点数自体が減っているためか、今年度はアフリカ関連本の刊行が減ったような気がします。関連本の見落としがないよう、これまで以上に目配りし、選書会の時間を持っていきたいと思います。
・選書会に出席できる人が限られて来ているので、来年度も地方の会員をはじめ、多くの方に本を読んでもらい、意見をメール等で募り、選書に反映させたいと思います。

３－５　支援グッズの製作・販売
・2016 年８月の子どもの本研究会展示に合わせて、トートバッグ 200 個とマスキングテープ 300 本を製作しました。（写真⑥）
・ どちらも沢田としきさんのイラストを使って、会員の沢田節子がデザインしました。
・ 好評のため、マスキングテープは年度中に 300 本追加製作しました。
・ HP からも注文できますので、ぜひご購入頂き、ご支援ください。

〇2017 年に向けて
・ 絵はがきの在庫が少なくなっているため、新しいものを作る必要があるかどうか検討する。
・ トートバッグも在庫少なくなっているので、再制作するかどうか検討する。

３－６　ホームページの更新

ホームページ http://africa-kodomo.com/では、ブログページで定例会の様子や日常的なご報告を、お知らせページで展示や会員関連の講演情報などもお伝えしますのでご覧ください。

他にインターネットでは、メールによるプロジェクト・ニュース配信と、フェイスブック（https://www.facebook.com/africachildrenbooks）を利用しての情報発信を実施しています。

フェイスブックページでは、2017 年 4 月 15 日現在、「いいね！」をクリックして下さった方は 357 名。ホームページとのリンクを含め、今後もホームページとフェイスブックの内容を充実していきます。

３－７　「プロジェクト・ニュース　JACBOP NEWS」の発信

電子メールを使って、運営会の報告、新会員の紹介、ケニアのドリームライブラリーの様子その他を会員向けに随時発信しました。

４、2016 年度決算報告（2016.4.1～2017.3.31）（省略）

５、2017 年度予算（2017.4.1～2018.3.31）(省略)

６、雑誌掲載等

１）「アフリカ NOW」106 号（2016 年 10 月 31 日発行）アフリカ日本協議会

「アフリカ子どもの本プロジェクト」について
Japan-Africa Children's Book Project (JACBOP)

さくま　ゆみこ
SAKUMA Yumiko

2004年から活動している「アフリカ子どもの本プロジェクト」は、現在会員が全国に約100名。小さな会ですが、月一回は定例の集まりを持って、さまざまなことを話し合ったり決めたりしています。私たちの活動には、

(1) ケニアに設立したドリーム・ライブラリー（現在、2館）を継続的に支える。
(2) 識字や楽しみのための本を必要としているアフリカの子どもたちがいれば、そこに本を届ける。
(3) 日本の子どもたちに、アフリカの文化やアフリカの子どもたちのことを伝える。

という3つの柱があります。

活動の発端にあるのは、『エンザロ村のかまど』（文：さくま、絵：沢田としき、福音館書店）という小学生向きのノンフィクション絵本で、『たくさんのふしぎ』という月刊誌の1冊として2004年に、単行本では2009年に出版されました。私はこの絵本で、金・モノではない国際協力のあり方を日本の子どもたちにも考えてほしいと考えて、岸田袈裟さんがケニアで行っていた活動を取り上げました。最初は日本で岸田袈裟さんのお話を聞いて感銘を受け、編集者として岸田さんに子どもの本を書いてもらおうと企画しました。そして岸田さんの活動地域である西ケニア州まで出かけていき、かまどづくりの講習会や村の人たちの反応、それぞれの家にあるかまどを見せていただいたのです。そのうち、岸田さんが「私は忙しいから、あなた書きなさいよ」とおっしゃって、自分で文章を書く羽目になりました。

岸田さんを訪ねていったときにエンザロ村（西ケニア州ビヒガ県の山間の村）にある小学校の先生や生徒たちにインタビューをしたこともあり、帰国後に何かお礼ができればと私は考えました。そして、最初は英語の絵本をエンザロ村の３つの小学校に送ったのです。なぜ英語かといえば、ケニアでは小学校に入ると英語の授業があり、8年制小学校の4年生くらいにもなれば、英語の本も読める子どもが多いからです。しかし、うまく届かなかったり、届いても局留めになって税金を払わないと引き出せなかったりという問題が起こりました。そこで岸田さんと相談し、子どもの本にかかわる仲間たちにも助けてもらって、エンザロ村で始めたのが、前述した活動の (1) で取り上げたドリーム・ライブラリーです。もともとはヘルスセンターのスタッフ宿舎として建てられたレンガ造りの建物に、地元の方がつくった書棚をおき、日本から持って行った600冊の絵本や児童書を並べて、この小さな私設図書館は始まりました。その後、現地で出版されているスワヒリ語や英語の本を購入したりして、現在は蔵書数が2,000冊近くになっています。また 2008年には、同じく西ケニア州カカメガの原生林の近くにあるシャンダ小学校の敷地の中に、第2の子ども図書館ができました。

エンザロ村の図書館は週5日半の開館で、自転車で通ってくるピーター・インブーカ（Peter Imbuka）さんというライブラリアンがいて、平均すると月にのべ700～1,100人くらいの人が利用しています。シャンダの図書館のほうは、地元の村のアイリーン・ナムニュ（Irene Namunyu）さんがライブラリアンとして働き、週3日開館しています。学校の生徒がよく使うので、利用者数は毎月のべ1,000人以上になります。

この2つの図書館は、これまでは岸田袈裟さんが関わっておられたNPO「少年ケニヤの友」と一緒に運営してきました。しかし、2010年に岸田さんが亡くなられてからは「少年ケニヤの友」が活動を縮小して現地からも撤退し、2016年3月には解散したことから、この2つの図書館を今後、具体的にどう維持していったらいいのか、私たちは頭を悩ませました。昨年夏に

さくま　ゆみこ　現在はフリーの翻訳家、編集者。著書は『エンザロ村のかまど』、『どうしてアフリカ？　どうして図書館？』（あかね書房）など。訳書は200点を超えるが、そのうちアフリカ関係の児童書は『トビのめんどり』（さえら書房）、『ネルソン・マンデラ』（鈴木出版）『路上のストライカー』（岩波書店）など34点。

ドリーム・ライブラリーの外観
ケニア・エンザロ村　2015年8月　撮影：さくまゆみこ

ドリーム・ライブラリーに来た子どもたち
ケニア・エンザロ村　2015年8月　撮影：さくまゆみこ

は２つのドリーム・ライブラリーを訪問して現地の方々と話し合いをもち、協力してくれそうな方を見つけ、今はそのケニア人の方たちを通してライブラリアンのお給料や新聞購読料などを送ったり、現地の様子を伝えてもらったりしています。

活動の (2) は、リクエストがあったところに子どもの本を送るという活動です。これまでナイジェリア、ルワンダ、ケニア、タンザニアなどに本を送ってきました。このときに送る本もドリーム・ライブラリーの蔵書も、なんでもいいから送るというわけではなく、一定の方針をもって本を選んでいます。当初は、現地の子どもたちが「自分が主人公」と思えるような本、世界への視野が広がる本、という方針で選んでいましたが、ナイジェリア人の会員から「日本の文化や日本の子どもについて紹介するような本も」という声が出て、今はその点も考慮しています。

活動の (3) は、日本の子どもたちに向けた活動です。「アフリカ子どもの本プロジェクト」のメンバーのなかには教員、司書、編集者、翻訳者、読書ボランティアとして子どもの本にかかわる人たちがたくさんいるのですが、定例の集まりのときには選書会も行い、日本で出版されたアフリカ関係の児童書をすべて読み合い、感想や意見を言い合っています。そしてその結果を、日本の子どもたちにおすすめできる本のリストにして公開しています。現在、おすすめ本は約180点にのぼっていますが、たとえば『ヤクーバとライオン』のように、世間ではもてはやされていてもリストに入っていない絵本もあります。なぜその本を推薦するのか推薦しないのかという情報は、そのつど会員の方たちにはお知らせしています。

リストをつくるだけでなく、おすすめ本をセットにして貸し出す活動も行っています。このセットには、受け取った側の方たちが、開いてすぐに展示ができるよう、図書展に必要なものがすべて含まれています。

セットにはＡとＢがありますが、Ａセットには以下のようなものが含まれています。

・アフリカ関連の児童書約120冊（各図書のデータと内容紹介カード付き）
・写真絵本（『おばあちゃんにおみやげを』『Ａはアフリカの Ａ』『いっしょにあそぼう』『戦争が終わっても』の本文にある写真パネル30点と、会員の画家によるイラストレーションパネル5点
・アフリカの子どもの状態を伝えるパネルやアフリカ地図
・「展示趣旨」「プロジェクトの紹介」および会場内の表示用パネル

Ｂセットには、Ａセットに加えて沢田としきさんの原画や泥染めのアフリカ地図、アフリカで出版された児童書などがつきます。

アフリカというと内戦、児童労働、子どもの兵士、飢餓、貧困などマイナス面が報道されることが多く、豊かな文化や、子どもたちの様子などについては知る機会が少ないかと思います。私たちはもっと楽しい側面や豊かな文化も知ってもらいたいと思って、セットをつくっています。貸出料は1会場につきＡセットが3万円、Ｂセットが5万円です。以前はセット使用の申込みが年間10件以上はあったのですが、最近は多くの自治体の図書館が外部委託にされ、独自の企画を打ち出せなくなったこともあり、申込み団体が減ってきているのが残念です。また展示に合わせて、会員がトークをしたりイベントを行ったりもしています。アフリカンフェスタなどでも子どものスペースを受け持って、いろいろなイベントを行ってきました。

今年は、広報を充実させるため新しいウェブサイトも作りました。

http://africa-kodomo.com

同時に折々の情報などはフェイスブックでも発信しています。

https://www.facebook.com/africachildrenbooks/

よろしかったら、どうぞ仲間に入ってください。年会費はたったの2,000円。入会金はありません。お気持ちのある方は、ウェブサイトの「会員になる」をご覧になってください。

2）「歴史地理教育」2016 年 4 月号（863 号）絵本で知ろう！ アフリカの国① 「エンザロ村のかまど」

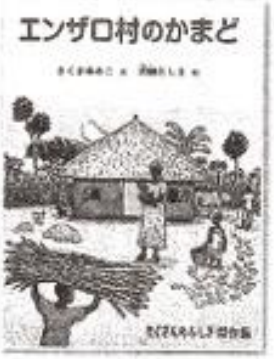
絵本で知ろう！ アフリカの国

細江 幸世

vol.

『エンザロ村のかまど』

さくまゆみこ 文
沢田としき 絵
（1300円＋税）
福音館書店
2009年6月発行
（ISBN978-4-8340-2449-4）



アフリカは54もの国が集まる大陸です。日本の中には、「アフリカ」という1つの国があると思っている子どもや「野生動物がたくさんいる」「貧困・紛争・怖い」という規格的なイメージしか持っていない人も多いようです。たしかに難しい問題を抱えている国々ではありますが、風土の違いが文化の多様性を生み、伝承の豊かさが物語や美術で表現されていることを、ぜひ知ってもらいたいと思います。

私たち「アフリカ子どもの本プロジェクト」（JACBOP）では、日本で刊行される子ども向けの本の中から、アフリカに関連するものをメンバーで読み合い、記述のしっかりしているものを選んで「おすすめ本リスト」を作成しています。この1年、メンバーが「絵本が伝える」アフリカの姿を紹介していきますので、どうぞよろしくお願いします。

今回紹介する絵本は『エンザロ村のかまど』。ケニア西部の小さな農村での暮らしを取材し、描いています。水道も電気もない暮らし。畑を耕し、牛や鶏を飼い、竈を編む。一見のんびりした毎日に見えますが、汚れた川の水を飲んで病気になる村人がいたり、赤ちゃんが死んでしまったりすることもよくあったそうです。そこで長年ケニアに暮らし、現地の女性たちと話し合いを重ねた岸田製袋さんが、村人たちと一緒に小石や砂を使った水の濾過装置を作り、レンガと土で作ったエンザロ・ジコという竈を普及させました。それまで5歳前の子どもの7人に1人が死んでいたのですが、竈を使うようになってから生まれた赤ちゃん135人のうち、5歳前に死んだのは1人だけ。水をきれいにし、沸かしてから飲むようになったことで、こんなにも死亡率が下がったのです。

この竈は身近にある日干しレンガと粘土で簡単に作ることができるのが画期的でした。電気や水道のない村では、最新の機械や技術はほとんど役に立ちません。岸田さんは、出身地である岩手県遠野で幼い頃に見てきた昔ながらの生活の知恵や手仕事の技術が、ケニアの村々で役に立つと気づいたのです。遠いケニアと日本が昔の暮らしの知恵でつながっていること、30年もかけて村人たちの暮らしに寄り添ってきた日本女性がいるということが、子どもたちに大きな驚きを与えることでしょう。

この絵本の中には村の小学生の1日の暮らしぶりも描かれ、遠くの友だちへの思いが広がる1冊にもなっています。

＊アフリカ子どもの本プロジェクト
HP：http://africa-kodomo.com/
（はそえ さちよ・編集者／JACBOP）

3）「Sosya News」2017 年 1 月 15 日　vol.39 新年号　鹿児島県青年会館

2016 年・秋 艸舎の催し　地域再発見のための読書活動×国際交流事業

太鼓のはなし　～アフリカ・たいこのひびき～

展示した絵本、児童書等は「アフリカ子どもの本プロジェクト」提供

「アフリカを読む　知る　楽しむ　子どもの本」展

11月3日(木)～12月4日(日)　ギャラリー艸舎

鹿児島県青年会館

関連イベント　手話通訳付

11月12日(土)9:30～11:30

●ドラムワークショップ（サウンドヒル）

●アフリカのおはなし／ブックトーク

・タンザニアのお菓子とルイボスティー

12月3日(土)10:00～13:00

●アフリカのおはなし

●アフリカ料理にチャレンジ

●コンゴ共和国のくらしと子ども

※おはなし会：ストーリーテリングの会・おはなしの森協力

ギャラリーは一月アフリカ一色

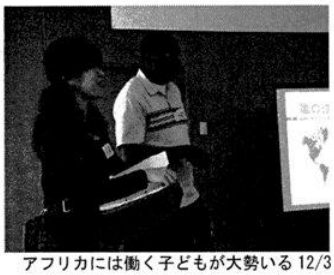
戦場の子ども達の写真集から目が離せない。

「さあ！アフリカのおはなしの時間です」

アフリカのおはなし「山の上の火」12/3

手話を交えてのストーリーテリング 11/12

本で知るアフリカの多様な文化や美しさ



アフリカには働く子どもが大勢いる 12/3

子どもが中心に野菜を切って下ごしらえ

「もっと底からこねて！」（ベンさん）

11 月 12 日は、県立聾学校の児童生徒が土曜授業として参加。サウンドヒルの徳田健一郎とその仲間によるドラムワークショップ・から始まった。ストーリーテリングの会・おはなしの森の大瀬さんによるアフリカのおはなしも手話を交え、ブック・トークは聾学校図書館司書の永田さんが本を紹介。みんながアフリカの世界に引き込まれた。

12 月 3 日は、ギャラリーでアフリカの絵本やおはなしを聞いた。神戸大学に留学中のコンゴ共和国出身のベンさんの指導で、アフリカ料理にも挑戦した。豆と魚のシチューとトウモロコシの粉を練った主食のフフもみんなで作った。アフリカの家族のことや子どもの生活について会場からはたくさん質問があった。大人も子どももアフリカを身近に感じた一日。

・子どもゆめ基金（独立行政法人国立青少年教育振興機構）助成活動
・公益財団法人鹿児島県国際交流協会国際交流活動助成事業

アフリカの人たちは、うれしい気持ち・悲しい気持ちをたいこの音で伝える！

「音はばっちりだよ、もっとリラックスして笑って！」ファシリテーターの徳田さん

みんなで太鼓にさわってみよう！

「リズムに乗って！掛け声を！」（徳田さん）

手話を交えてのおはなし会やドラムワークショップは、艸舎にとっても新しい試み。隣接する豐学校の児童生徒達が青年会館を訪れ次のような感想を残した。

＜アンケートより（抜粋）＞

・アフリカのおかしはさつまいもからできているっていっていました。おちゃはなにからできているのか、またあったら、ききたいです。（小学１年）

・アフリカの太こを聞いて、何かいい音がして、もっと聞きたくなるほどでした。また、日本の太こは牛のかわでできているけど、アフリカの太こはやぎのかわでできているということをはじめて知りました。（小学３年）

・アフリカの話でニャーシャとハイエナとエルマの話しが一番ぞっとしました。（小学５年）

・ジャンベをたたいているとヤギのたましいや木のたましいと職人のたましいを感じました。他にどんなアフリカのたいこがあるのか知りたいと思っています。（小学５年）

・今までアフリカの太鼓があると知らなくてびっくりしました。だからアフリカの太鼓を体験したりアフリカについて勉強したりして楽しかったです。（中学１年）

・アフリカには動物がたくさんいるので、その動物のおはなしになっていて、聞くのがたのしかったです。（中学１年）

・ジャンベの音の高さを変えられることに驚きました。最後にみんなで一緒に演奏したことに感動しました。（高等１年）

・おはなし会で「ライオンと子ぎつね」のお話が印象に残りました。強いから自慢することではなく弱い者でも平等にするべきだと僕は思いました。（高等１年）

・世界中のたくさんの違う異文化と触れ合い、お互い分かち合うことが大切だと学ぶことができました。（高等１年）

桃月庵白酒独演会

この秋、ゆるいと亭主催「百人で聴く落語会」が開催された。6年ぶりに艸舎で行われた桃月庵白酒独演会。間近で見る白酒師匠の迫力に満員の会場は圧倒された。ゆるいと亭、今年は初夏にふたたび艸舎で落語会開催予定。桃月庵白酒独演会は、秋に黎明館講堂を予定。

写真提供：ゆるいと亭 11 月 16 日

青年問題研究所からの報告

2014 年夏に「市町村における青年組織の実態調査」を実施。県内 43 市町村の青年組織担当者を対象にアンケート調査を行いました。

2015 年～2016 年にかけて、アンケート調査と行政資料の結果を分析し、青年組織の県内の現状や現在の青年組織の特徴や課題などを明らかにしました。

事務局の池水聖子が鹿児島大学教育実践総合センターに研究協力員として所属。調査の結果については、『教育学部教育実践研究紀要第 26 巻』（2017 年 3 月発行予定）に掲載されます。

この数年、読書活動で地域に伝わる昔話を学びながら、民俗学者の下野敏見先生に青年向けに郷土芸能について講演していただいております。

また、今年は、5 年振りに伝統芸能（大崎町神舞）が県の青年大会に出場、全国大会では努力賞を獲得し、地域からも多くの支援をいただいたと報告受けました。

これからの地域の中で郷土芸能や文化に青年組織が関わっていくことは、青年の学びにおいてもとても大事だと感じています。

昨年は、事例研究としてさつま町中津川地区において伝統芸能継承活動を行う青年組織の構成員や地域の指導者へのインタビュー調査（2015 年～2016 年）をもとに、青年組織を生成するまでの過程とその組織の特徴について、日本社会教育学会（弘前大学 2016 年）において発表しました。

大隅半島（鹿屋市王子町）からは伝統芸能保存継承について相談があり、下野敏見先生のご意見も伺い、支援しています。艸舎として、社会教育の側面からの支援体制を模索していきたいと思っております。これからも鹿児島の青年組織と地域の文化継承について取り組んでいきたいと思っています。（報告：池水聖子）